

渡り鳥飛来 バードストライク警戒

仙台空港 トリ締まりに力

渡り鳥が飛来するシーズンに入り、航空機に鳥が衝突するバードストライクへの警戒が高まっている。国内有数の飛来地を抱える宮城県にある仙台空港（宮城県名取市、岩沼市）では、敷地内のパトロールや周辺環境の整備に力を入れる。たった1羽でも引き起こされる重大事故を防ぐと、人知れず乗客の安全を守る現場取材した。

滑走路脇草地 絶好の餌場

「パン！」。滑走路に空砲が響き渡る。10月21日昼過ぎ、鳥の防除を受託する応用生物（東京）の社員2人が車で巡回中、離着陸のルート近くに1羽のトリを発見。刈り込まれた草地に潜む大きく肥えたバッタなどを狙っているという。

すみよい環境

トリはなかなか敷地からいなくなる。2人は「煙火」と呼ばれるロケット花火でより大きな音を出し、旗を振り、クラクションを鳴らす。15分ほど追

い回し、トリはようやく敷地外に飛び去った。応用生物の菅原一馬（仙台事務所長35）は「しつこい鳥だ」とやうにがっかり。お客さんが何も知らず、無事に飛行機が飛んでいった時が何よりもうれしい」とほほえむ。

仙台空港は堀や海、田んぼなど鳥が集まりやすい環境に囲まれている。運営する仙台国際空港（名取市）によると、春先はヒバリやツバメ、夏から秋はチヨウゲンボウ、秋はトリノスリ、冬はカモが多く見られる。

広さ約250畝に及ぶ空港敷地内にも鳥にとって絶好の食場所がある。飛行機が滑走路をそれた場合に緩衝地帯となる広大な草地は餌が豊富。フェンスで囲まれているのでタヌキやキツネなどの天敵も少なく、まさに天国だ。菅原さんは「鳥も生活が懸かっている。何としてもおいしい思いをしてやるという彼ら（鳥）の気遣い、執念に対処するのは大変」と語る。

追い払い、時に駆除も

経費年200万円

いろいろな音で脅かしたり、時には駆除したりして人間の怖さを教え込むなど、件数減少に一定の役割を果たしている。周辺環境にも目を光らせ、関係機関と連携して鳥の巣やごみといった鳥が集まる要因を解消する。

機体に衝突した鳥や、敷地に飛来した鳥の種類、餌などの情報は国土交通省を通じて全国的な対策に生かされているという。

で旅客機が着陸に失敗し179人が死亡した事故でも、原因になったとみられる。仙台空港では多い年で25〜30件、ほとんどが離着陸時に発生。空港は対策として1992年ごろから1日4〜5回、敷地内を巡回する「パトロール」を実施する。



空砲を撃ち、離着陸ルート付近の鳥を追いかける菅原さん

人件費や銃弾の購入費などの経費は年約2000万円。仙台国際空港で鳥獣担当を務める鍵本聖さん（27）は「少しでも鳥に当たらない環境をつくるのがお客さまの安全につながる。自然相手だが頑張りたい」と話す。（吉田ちひろ）